

こころ日記「ぼちぼち」 その③

M先生からの学び

昔々学級担任をしているころ、毎日「学級通信」を出していた。その頃年間授業日数は200日を超えていた。私の目標は毎日出すこと、200号を達成することだった。これは教育実習の担当教官だったM先生の影響からだった。



小学校、中学校、高等学校の教員免許を取ったが、M先生とは小学校の実習でお世話になった。M先生の学級経営は学ぶことばかりだった。まるで魔法をかけたかのように子どもたちを操り、一人一人の子どものやる気を引き出していく。

毎日もめごともあったが、話し合いをさせながら自分たちで解決する方法を考えさせる。この様子を見て、私はこんな先生になりたいなと思った。子どもに大きい声で怒ることがなく、静かに叱る。おそらく子どもの動きをよく観察し、その成長に理解を持っていた人だったのだろう。



放課後、M先生は毎日職員室の机に向かい、親向け学級通信を書いていた。毎日何をそんなに書くことがあるのだろうと、読ませてもらっていた。今はパソコンでササッと打てるが、当時は手書きが主流。B4用紙びっしりの文字。失礼ながらそんなに丁寧な字ではなかったが、その内容は子どもたちの一日の学習や遊びの様子、そして

担任として日々思うことを、M先生らしい言葉で綴られていた。

M先生の学級通信は、親たちは毎日とても楽しみにしていた。自分の子どもが、日々どのように過ごし成長しているのかがつぶさにわかる通信に、親たちは信頼を増していった。その通信を通して親同士が繋がっていったこともあったと思う。

授業が勝負！

そしてM先生からは、教員は日々学び続けることが大切であることも教わった。

今学校現場は超多忙化しブラック化している。つい20年ほど前までは、まだ教員には余裕があり、長期休みなどに自費でも研修に参加するという空気があった。私も40年近く、人権や性教育といった研究や研修にたくさんの時間とお金をかけてきた。

M先生は休みになると、教員の学び場であるサークル活動に参加し、教材作りや子どもにわかるおもしろい授業の実践と研究に取り組んでいた。いわゆる教科書にない学習の実践でもあり、包括的な学習を目指していたのだ。M先生の授業には、常に「子どもたちにわかる喜びを、学ぶ楽しさを！」がベースにあった。

特に理科の専門でもあったので、実験の準備には惜しまず時間をかけた。学習の流れは、実験を体験させ、観察、なぜそうなるかを探求していく。科学的なことに興味を持てる工夫がいっぱいであったので、多くの子どもたちは理科が大好きになっていった。



実習生にも、自分の持っている教材など、惜しみなくオープンに紹介してくれた。私もM先生が関わる研究会に参加するなど、色々な知識を身につけさせてもらった。長く教員を続けられたのも、その時に伝えてもらったことが大いに活かされていたからだと思う。

そしてM先生は、いつも「一時間一時間の授業が勝負！」つまり、その時間に何をどのようにして伝えるかを工夫し全力を注ぐこと。教師は毎年同じことを教えることを繰り返しているから、ついマンネリ化してしまう。子どもにとって、その1時間の学習は、その時にしかない。子どもの側に立てば、一生に一度しかない学習だ。つまり一期一会の出会いと考えて準備し、実践することを忘れてはいけないと言われた。

さて、私の学級経営は？

教員生活の最初の10年ほどは小学校勤務だった。初めて学級担任になったとき、やはり真っ先に思い出したのがM先生の学級経営だった。現在小学校の学級担任は毎年変わるが、以前は持ち上がりで2年間持つことが多かった。自分に合う担任ならいいが、合わない先生となると子どもも毎日が大変だ。担任も子どもを選べない。手のかかる子どもを2年間持つとなると、ちょっと覚悟がいる。

私にとってM先生は理想であるが、正直子どもたち全員から好かれる先生なんてなれない。よく子どもたちは「優しい先生」が好きと言う。「優しい先生」とは、どんな先生のことだろう。残念ながら私は、「優しい先生」とは言われなかった。かといって嫌われもしない先生でもあった。大切にすることは、M先生のように、子どもには嫌みや脅しの言葉を使わなかったことだろうか。

私は末っ子で家庭状況はややこしく、どちらかというところ放置されて育った。小学校に入ったころは、家族は仕事や学校で誰もいなかったから、家に帰れば好きなことが

できた。外で遊ぶことが好きで、危険な目にも遭ったことがあるくらい活発だった。

一方で入学前の小さい妹に、大人たちは学校で困らないようにと、読み書きなど熱心に教えた。だから学校に入っても、知っていることばかりで授業が面白くなかったのを覚えている。先生に当てられても、寡黙になり答えない。教師にとっては、とても扱いにくい子どもだったにちがいない。だから注意をされることはあっても、褒められることがあったかなと思う。

子どもは敏感である。大人が自分のことをどう思っているかがわかるものだ。教員を目指したときから、子どもの気持ちに少しでも近づくことができると考えていた。



早速、学級通信を毎日書くことを目標にした。通信の名前は、子どもたちに決めさせた。子どもたちを見ていると毎日通信の材料になる場面は事欠かない。泣いたり笑ったり、35人いれば35人の顔があり、35人の性格がある。じっと観察すると、子どもの思わぬ行動と発言の驚きと感動がある。1年間200号を目指し学級通信を書き続けたこと、自分で褒められることは少ないが、このことだけは自慢できる。

今も残る学級通信。懐かしく読み返すことがあるが、毎日丁寧に綴じていてくれた親がいたのを思い出す。

「先生、〇号が届いていないのでお願いします」などの連絡もあった。子どもたちは何をするかわからない。下校途中で道に落として帰る子もいて、落とし物として届けられたときは、恥ずかしい思いをしたことも…。

最近よく中学校への訪問に行くが、教室に学級通信が掲示されていると、今も変わらぬ風景に懐かしさを感じる。

つづく